



[原著]

## コロナ禍における看護学生の看護技術学習方略の実態

奥野友紀<sup>1</sup>、川村真紀子<sup>2</sup>、加藤治実<sup>2</sup>、小園千草<sup>3</sup>、平賀元美<sup>4</sup>、三吉友美子<sup>2</sup>

- 1) 梶山女学園大学 看護学部 看護学科
- 1) (現所属：名古屋学芸大学 看護学部 看護学科)
- 2) 藤田医科大学 保健衛生学部 看護学科
- 3) 朝日大学 保健医療学部 看護学科
- 4) 名古屋学芸大学 看護学部 看護学科

### 要旨

**背景：**コロナ禍により、遠隔授業など教育方法が変更された。それに伴い、看護技術の学び方は変化したのではないかと推察する。本研究では、コロナ禍における看護学生の看護技術学習方略の実態を明らかにすることを目的とする。

**方法：**2021年7月に、紙媒体もしくはWebによる無記名の質問紙調査を実施した。対象は、東海地方の看護系大学5校に所属し、入学後の全期間をコロナ禍で過ごす1・2年次生824名とした。調査内容は、看護技術学習方略尺度(以下、NSLSS)とした。

**結果：**465名を分析対象とした(回収率58.0%、有効回答率97.3%)。NSLSS得点の中央値は4.24点、最小値は1.12点、最大値は6.00点であった。下位尺度得点の中央値は4.00~4.50点、最大値は全て600点、最小値は「計画・調整」が125点、「認知的志向」「ピア学習」「情動調整」が1.00点であった。学年別のNSLSS得点の中央値は、1年生が4.18点、2年生が4.29点であり、有意差はなかった。

**結論：**NSLSS・下位尺度得点の中央値は、先行研究とほぼ同じであった。しかし、「ピア学習」と「認知的志向」を全く使用しない者が存在したことから、コロナ禍の影響により、学習方略の使用において個人差が大きくなることが示唆された。また、1年次生よりも2年次生の方が、コロナ禍の影響が大きいと考えたが有意な違いはなかった。

**キーワード：**看護技術教育、看護学生、看護技術、学習方略、COVID-19

### 1. 序論

新型コロナウイルス(以下、COVID-19)の感染拡大により、多くの教育機関で新たな教授方法へ変更が余儀なくされた。大学教育においては、情報通信技術(以下、ICT)を活用した、非対面方式で授業を行う遠隔授業が多くの大学で導入された(1)。

2020年度は、約8割が遠隔授業を使用

して授業が実施され、2021年度は遠隔授業を併用しながらも半分以上を対面授業とする大学が約9割に増加したが、学部や学年により授業形態に差があることが報告されている(1)(2)(3)(4)。授業の対面・遠隔での実施方針は、国の基準・方針は勿論、COVID-19感染状況などの地域性によっても異なっており(5)、学内施設のキャパシティや在籍する学生状況などの要因

奥野 友紀

名古屋学芸大学 看護学部 看護学科

Email: okuno@nuas.ac.jp

2022年 8月8日受付  
2022年 12月2日受理

から、各大学が方針を確定していた (2) (3) (6)。そのため、2020 年からの COVID-19 感染拡大時 (以下、コロナ禍) においては、教育の内容・方法は各大学、各地域によって様々である。

遠隔授業において、困難であった教育の一例として、集団性を伴う実践教育がある。看護基礎教育においては、看護技術教育や臨地実習が該当すると考える。看護技術教育は、認知面だけでなく身体活動を伴う実践の学びやグループ活動による集団の学びが必須である。そのため、コロナ禍においては、技術演習で扱う看護技術項目の変更が、看護職養成校の約 4 割で実施され、教授方法の変更が約 7 割で実施されていた (7)。具体的には、対面での教授方法として、少人数制での演習や学生間の教材の共有回避、課題や教材の工夫が報告されている (8) (9) (10)。また、遠隔での教授方法として、ICT 活用のもと自宅でできる看護技術演習 (11) (12) (13) (14) やリアルタイム配信での演習 (15)、技術の動画配信 (16) (17) が報告されている。

看護技術は「教育目標の分類体系 (18)」に示された認知領域・情意領域・精神運動領域の内容が統合された行為であり、知識面の学習だけでなく、対象者への配慮を含めて、実際に身体を使って実施する技術面の学習が必要である。看護基礎教育においては、専用の実習室、学生自習室を有することが設置基準 (19) (20) として定められており、授業時間外に知識面・技術面の自己学習ができる環境が整備されている。したがって、コロナ禍前の看護学生は、整備された物理的環境 (自習室や図書室、看護実習室等) と、友人や教員に直接話すことができる人的環境下で、自己学習が可能であった。しかし、コロナ禍においては感染対策として、学内施設の利用制限や (1) (2) (3) (4)、自己学習の場である看護実習室の使用人数・練習時間の制限 (21) がされており、看護学生の自己学習環境は変化していた。それに伴い、自己学習時の学び方、いわゆる学習方略に違いがあるのではないかと考えた。

看護技術は、1・2 年次に基礎看護技術

を学習後、母性や小児など各看護学領域で、特有の看護技術を学習する。2020 年度、2021 年度に入学した 1・2 年次生は、入学後の全期間をコロナ禍で過ごしており、コロナ禍前とは異なる方法で基礎看護技術を自己学習していることが推測される。特に 2020 年度入学の 2 年次生は、入学後すぐに登校制限となり、その期間が長かったことから、2021 年度入学の 1 年次生よりも遠隔授業が多く、コロナ禍の影響が大きい学年であるといえる。先行研究をみると、コロナ禍における看護技術の教授方法に関する報告は散見されるが、看護学生が自己学習時に用いる学習方略について調査した研究は見当たらなかった。

以上のことから、本研究の目的はコロナ禍の看護学生が、看護技術の自己学習に使用する学習方略の実態を明らかにすることである。これにより、看護学生が看護技術学習方略を獲得するための示唆を得られると考える。

## II. 方法

### 1. 研究デザイン

無記名の自記式質問紙調査法による横断的調査研究

### 2. 用語の操作的定義

#### 1) 看護技術

三吉、細田の看護技術学習方略尺度 (22) (以下、NSLSS) の定義に従い、看護技術は「教育目標の分類体系 (18)」に示された認知領域・情意領域・精神運動領域の内容が統合された行為であり、具体的には対象への配慮を伴う専門的知識に裏付けられた、学習や練習を経て身につく看護の技であり、看護実践の基盤である」とする。

#### 2) 看護技術学習方略

三吉、細田の NSLSS (22) の定義に従い、看護基礎教育において看護学生が看護技術を自己学習する時に使用する学習方略を示す。

#### 3) 自己学習

野村の定義 (23) に従い、自己学習とは、基礎看護技術の原理や方法などの理解や、方法を繰り返し学習し身体に身につけ

表1 看護技術学習方略尺度 (NSLSS)

下位尺度名・項目
<p><b>認知的志向</b>                      技術を練習するだけでなく、知識の見直しをする。                      絵や写真を活用して学習する。                      根拠が詳しく書かれている本や資料を参考にする。                      学習時にできなかったことや間違えたことの原因を考える。                      わからないことがあった時、まずは自分で調べて解決しようとする。                      対象者の性別や年齢、動ける範囲などの患者の状態を想定して、実施方法を考える。</p> <p><b>ピア学習</b>                      他学生が技術を実施するのを見て、他学生の実施方法のどこが良いか、悪いかを考える。                      他学生が技術を実施する時に患者役となり、気づいた点を他学生に伝える。                      他学生が技術を実施する時に、患者役になりきり、患者の身になって自らの技術の改善点を見つける。                      自分の技術のどこが良かったか悪かったかについての意見を、他学生に自分から求める。</p> <p><b>情動調整</b>                      うまくできた時には「よくやった」などと自分を褒めるようにする。                      自分ではできると言い聞かせるようにする。                      うまくできた時のことを思い出すようにする。</p> <p><b>計画・調整</b>                      自分で決めた計画にそって学習する。                      学習計画にはどのように学習するかといった学習方法を含める。                      学習期間の途中で、学習が計画どおりすすんでいるかを考える。                      学習をはじめるとにあたり、いつまでに何をできるようにするかといった自分の目標を自分で定める。</p>

三吉友美子, 細田泰子. 看護技術学習方略尺度の開発—信頼性・妥当性の検討—. 日本看護学教育学会誌. 2015,24(3),p.1-11.

るために、学生自身が授業時間外に行う学習活動とする。

### 3. 調査対象者

対象大学は便宜的抽出法により抽出し、学部長または学科長宛に文書で依頼し、承諾が得られた東海地方の看護系大学5校とした。対象者は、入学後の全期間をコロナ禍で過ごしている、2021年度の1年次生と2年次生824名とした。

なお、看護技術の自己学習で用いる学習方略を調査するため、研究対象者は看護技術の講義・演習科目を履修した学生とした。

### 4. 調査期間

2021年7月～10月

### 5. 調査内容

調査内容は1) 対象者の基本属性・背景、2) 看護技術学習方略とした。

#### 1) 対象者の基本属性・背景

対象者の性別や学年などの基本属性と、他大学での学習経験、社会人経験の有無や、所属大学の自己学習環境、自己学習方法の指導を他者から受けた経験、実技試験の有無など、看護技術の学習について調査した。

#### 2) 看護技術学習方略

三吉、細田のNSLSS(22)(表1)を用いて調査を行った。本尺度は、認知的な働きを必要とする「認知的志向」、仲間と一緒に学習する「ピア学習」、学習意欲を高めるための情動を調整する「情動調整」、学習計画の立案や計画に沿って実施する「計画・調整」の4下位尺度、17項目で構成されている。Cronbachの $\alpha$ 係数は.82であり、尺度の信頼性・妥当性は検証されている。

回答方法は、授業時間外の看護技術に関する自己学習(机上の学習・技術の実技練習も含む)の方法を思い出し、6件法で回答するものである。「全くあてはまらない」を1点、「かなりあてはまらない」を2点、「どちらかといえばあてはまらない」を3点、「どちらかといえばあてはまる」を4点、「かなりあてはまる」を5点、「非常にあてはまる」を6点として得点化する。「あてはまる」は「使用している」ことを表している。全17項目の総得点を項目数で除した得点をNSLSS得点、各下位尺度

表2 対象者の基本属性・背景 (n=465)

項目	人	%
性別	女	439 94.4
	男	26 5.6
学年	1年	196 42.2
	2年	269 57.8
他大学での学習経験	有	10 2.2
	無	455 97.8
就職経験	有	2 0.4
	無	463 99.6
自己学習を行う学習環境	整っている	415 89.3
	整っていない	49 10.5
	無回答	1 0.2
自己学習方法を教えてもらった経験	ある	360 77.4
	ない	105 22.6
自己学習方法の指導者 (複数回答)	教員	312 67.1
	先輩	26 5.6
	同級生	197 42.4
	その他	16 3.4
実技試験など 教員による他者評価の経験	ある	337 72.5
	ない	125 26.9
	無回答	3 0.6

に属する項目の総得点を項目数で除した得点を下位尺度得点とする。得点範囲は1~6点であり、6点は学習方略の使用頻度が高いことを示し、1点は全く使用していないことを意味する。

### 6. データ収集方法

研究協力の承諾が得られた大学側の負担を考慮し、調査可能な学年および人数、希望する配布方法を文書で確認した。遠隔授業により、質問紙を配付・提出する機会がない大学があることを想定し、質問紙は紙媒体もしくはWebのどちらかを選択できるようにした。Webは、Google社のGoogleフォームを使用した。選択理由は、Google社は知名度が高く使用者が多いと予測されること、操作性が容易であること、費用がかからないこと、送信が1人1回限りという条件が担保され、二重回答の防止ができることである。Googleアカウントの所持が前提となるため、所持していない場合はアカウント作成するか(無料)、紙媒体のアンケートで回答を得た。回収は、対象者が個別に質問紙を投函もしくはWeb送信する方法を用いた。

### 7. 分析方法

正規分布であるかを、Kolmogorov-Smirnov検定にて確認した上で、基本統計量を算出した。次に、NSLSS得点と下位

尺度得点の学年による違いをMann-Whitney U testで確認した。なお、検定の有意水準は5%とし、統計解析ソフトはIBM SPSS® Statistics Base Grad Pack 27.0版を用いた。

### 8. 倫理的配慮

本研究は、椋山女学園大学研究倫理審査委員会の承認(受付番号202)後に行った。研究対象者が学生であるため、強制力が働かない様に研究説明は、評価に関わらない者が授業時間外に実施した。質問紙調査への協力は個人の自由意思であること、学業成績への影響や不利益は生じないこと、得たデータは研究以外の目的で使用しないことを文書で説明した。また、文書には質問紙に個人が特定できる情報はないこと、Googleアカウントや個人のメールアドレスの収集はシステム上不可能であることを明記し、回答後の研究協力の撤回は困難であることを説明した。また、Webアンケートはインターネットにアクセスするための通信費を除き、費用はかからないことを文書に記載した。なお、同意については投函もしくはWeb送信をもって同意とすることを文書に提示した。尺度の使用にあたっては、尺度開発者に使用許可を得た。

## III. 結果

本調査は478名から回答を得た(回収率58.0%)。そのうち、回答に欠損のあったものを除く465名を分析対象とした(有効回答率97.3%)。

### 1. 対象者の教育背景と基本属性(表2)

承諾が得られた大学は、A県の大学が3校、B県の大学が2校であり、国公立大学1校、私立大学4校であった。地域性でみると、A県はCOVID-19の感染者が多いことから、B県より国策として登校が制限された期間が長かった。各大学のコロナ禍による影響は、それぞれで異なった。2020年度4月時に、予定通り開講した大学もあれば、開講を遅らせた大学もあった。授業形態や遠隔授業で使用する学習管理システムも、各大学で異なっていた。看護技術教育においても同様であり、感染対策の観点から、登校日を限定したり1学年

表3 看護技術学習方略尺度 (NSLSS) 得点

	中央値	第1四分位数	第3四分位数	最小値	最大値
看護技術学習方略尺度得点	4.24	3.82	4.71	1.12	6.00
下位尺度					
情動調整	4.00	3.33	4.67	1.00	6.00
計画・調整	4.00	3.50	4.50	1.25	6.00
ピア学習	4.50	4.00	5.00	1.00	6.00
認知的志向	4.50	4.00	4.83	1.00	6.00

(n=465)

Smirnov 検定を実施した結果、正規性は確認できなかった。学年別の得点においても同様であった。全対象者の NSLSS 得点の中央値は 4.24 点、最小値は 1.12 点、最大値は 6.00 点であった (表 3)。各下位尺度得点の中央値は、「ピア学習」が 4.50 点、「認知的志向」が 4.50

を 3 分割して実施する対面演習や、ICT を用いて自宅で実施する遠隔演習が各大学で実施されていた。また、学内施設の利用についても、使用日を限定し自己練習を実施した大学もあった。

対象者の性別は、女性が 439 名 (94.4 %) 男性は 26 名 (5.6 %) であった。学年は 1 年次生が 196 名 (42.2 %)、2 年次生が 269 名 (57.8 %) であった。入学前に他大学での学習経験があった者は、10 名 (2.2 %)、就職経験があった者は 2 名 (0.4 %) であった。所属大学の自己学習を行う学習環境は「整っている」が 415 名 (89.3 %) であった。また自己学習方法を教えてもらった経験は「ある」が 360 名 (77.4 %) であり、教えてもらった相手は教員が 312 名 (67.1 %) と最も多く、次いで同級生が 197 名 (42.4 %)、先輩が 26 名 (5.6 %) であった。その他、家族やアルバイト先の人、看護師等が 16 名 (3.4 %) であった。また、実技試験や技術チェックなど、教員による他者評価の経験の有無は「ある」が 337 名 (72.5 %) と 7 割が経験していた。

## 2. 看護学生の看護技術学習方略の使用頻度

NSLSS 得点と下位尺度得点の、Kolmogorov-

点、「計画・調整」が 4.00 点、「情動調整」が 4.00 点であった。各下位尺度得点の最大値は、いずれも 6.00 点であり、最小値は「計画・調整」は 1.25 点、「認知的志向」「ピア学習」「情動調整」は 1.00 点であった。

学年別で見ると、1 年次生の NSLSS 得点の中央値は 4.18 点、2 年次生は 4.29 点であった (表 4)。下位尺度得点では、「情動調整」「計画・調整」「ピア学習」は 1 年次生、2 年次生が共に同じであり、「認知的志向」のみ 1 年次生が 4.33 点、2 年次生が 4.50 点であった。各下位尺度得点の最大値は、2 学年とも全てが 6.00 点であり、最小値は 1 年次生の「計画・調整」が 1.25 点、2 年次生の「計画・調整」と「認知的志向」が 1.50 点であった以外は、すべて 1.00 点であった。学年別の NSLSS 得点と下位尺度得点の違いを Mann-Whitney U test で分析した結果、いずれも 1 年次生と 2 年次生の間には有意差はなかった ( $p = .303 \sim .955$ )。

## IV. 考察

### 1. コロナ禍の看護学生が、看護技術の自己学習に使用する学習方略の実態

NSLSS 得点の中央値は 4.24 点であり、下位尺度得点では 4.00 点から 4.50 点であった。

表4 看護技術学習方略尺度 (NSLSS) 得点の学年比較

	中央値	第1四分位数	第3四分位数	最小値	最大値	平均ランク	順位和	<i>p</i>
看護技術学習方略尺度得点	1年生 4.18	3.76	4.71	1.12	6.00	229.60	45002.00	0.641
	2年生 4.29	3.82	4.71	1.47	6.00	235.48	63343.00	
下位尺度								
情動調整	1年生 4.00	3.33	4.67	1.00	6.00	238.93	46830.00	0.413
	2年生 4.00	3.33	4.67	1.00	6.00	228.68	61515.00	
計画・調整	1年生 4.00	3.25	4.75	1.25	6.00	233.41	45749.00	0.955
	2年生 4.00	3.50	4.50	1.50	6.00	232.70	62596.00	
ピア学習	1年生 4.50	3.75	5.00	1.00	6.00	225.52	44202.50	0.303
	2年生 4.50	4.00	5.00	1.00	6.00	238.45	64142.50	
認知的志向	1年生 4.33	3.92	4.92	1.00	6.00	227.21	44534.00	0.427
	2年生 4.50	4.00	4.83	1.50	6.00	237.22	63811.00	

※四分位数はTukeyのヒンジ値

領域別実習未履修の3年次生を対象に、NSLSSを使用した先行研究(24)において、NSLSS得点の平均値は4.19点、下位尺度得点では3.76点から4.50点であった。中央値と平均値とでは比較が難しいこと、対象学年が異なることを鑑みると一概に言い切れないものの、本研究の結果は先行研究(24)とほぼ同じであった。最大値においても、NSLSS得点および下位尺度得点ともに先行研究(24)と同じ6.00点であった。しかし、最小値においては、今回のNSLSS得点が1.12点であったのに対して、先行研究(24)では3.00点であった。さらに、下位尺度得点においては、今回の調査では「計画・調整」が1.25点であった以外は1.00点であった。それに対して、先行研究(24)では「情動調整」が1.00点であったものの、「計画・調整」は1.25点、「ピア学習」は2.00点、「認知的志向」は3.33点であった。すなわち、「情動調整」と「計画・調整」はコロナ禍による変化は認められなかったが、「ピア学習」と「認知的志向」は最小値の得点が低くなった。最小値が1.00点ということは、その学習方略を全く使用しない者が存在したことを意味する。これらのことから、「ピア学習」と「認知的志向」はコロナ禍により影響を受けやすい学習方略であることが示唆された。

「ピア学習」は、看護技術を学習する上で患者役または観察者として、仲間と協同して学習する方略である。「ピア学習」を全く使用しない者が存在したのは、コロナ禍で協同して学習する機会がなかったことが影響していると考えられる。「認知的志向」は、学習内容を記憶したり理解したりする際に用いられる方略である。よって、自己学習時には欠かせない学習方略といえる。この学習方略を全く使用しないということは、知識の裏付けによる根拠の学習が不十分なまま、看護技術を学んだ学生の存在が示唆された。今回、自己学習方法を教えてもらったことが「ある」と答えた学生の42.4%が、その相手を「同級生」と回答した。これは約4割の学生が同級生であるピアから学習方法を学んでいることを意

味する。しかし、コロナ禍においてピアとの学習機会が少なくなったことにより、学習方法を学ぶ場を喪失し、学習方略の使用に影響したのではないかと推察する。コロナ禍前との最小値の違いから考えると、こうした影響は「ピア学習」と「認知的志向」の使用に参与したものと推測する。

学年別の最大値、最小値の結果において、学年に関わらず学習方略を非常によく使用する者と全く使用しない者が存在したことから、学習方略の使用には個人差が生じていたといえる。緒方らはコロナ禍の在宅学習ならではの課題として、学生間で学習への取り組みに差が生じていたと述べている(14)。遠隔授業やコロナでの生活への適応は、適応できている者とそうでない者がいること(25)が示されており、コロナ禍においては個人差があることが述べられている。また、学生の精神面については不安や抑うつ、孤独、意欲の低下などが報告されており(26)(27)、対象者の中には学習意欲を喪失した学生も存在したのではないかと推察する。教育心理学では学習方略と動機づけとの関連が明らかにされている(28)。情動が調整できなかった学生は、学習への動機づけを自らできず、学習方略の使用に影響を与えたのではないかと推察する。したがって、学習方略の使用頻度に個人差が大きくなったのは、コロナ禍の影響があるのではないかと考える。

1年次生と2年次生のNSLSS得点・下位尺度得点の中央値に有意差はなかった。2020年度入学の2年次生は、1年次は自宅学習期間が長く、大学の学習環境が利用できない期間があった。また、遠隔により友人ができにくく、ピア学習もしづらい状況にあった。コロナ禍前には実施していた看護技術の実技試験がない大学もあり、自己学習をする機会が減少したことが推測された。そのため、2年次生は2021年度入学の1年次生よりコロナ禍の影響が大きく、学習方略の使用に違いが生じるかと考えたが、有意な違いはなかった。この結果は、コロナ禍において各大学が学生の学びを止めない様に、対面授業の増加など随時教育方法を見直して対応したことが影響してい

るのではないかと考える。また、2021年度は大学への入構制限が緩和され、コロナ禍前の学習環境に近づいたことが影響して、学年間で有意差はなかったのではないかと考える。

## 2. 看護技術学習方略を獲得するための示唆

学習方略は、教育心理学や認知心理学において学業成績に影響を及ぼすことが明らかにされている(29)。前述した3年次生の先行研究(24)においても、看護技術学習方略は看護技術の修得に正の影響を示すことが示唆されている。すなわち、看護技術の修得を高めるためには、看護技術学習方略を多く使用する必要があるといえる。伊藤は、学習方略の獲得は「他者からは、『口頭での注意や忠告』や『授業などの一斉指導』によるものが多く、(中略)自ら獲得した学習方略については、『経験・実体験』『問題解決、困難の克服』『有効性の認識』によるものが多かった」と述べている(30)。今回、他者から自己学習方法を教えてもらった経験が「ない」と回答した学生が22.6%存在した。コロナ禍においては、「ピア学習」の機会や教員からの具体的な学習方略の指導を受ける機会が少なかったこと、実際に看護技術を実施する機会が減少したことが、学習方略の獲得に関与していると推測する。

以上のことから、学習方略を獲得するには、学生が看護技術学習方略の有効性を認識し、使用できるように指導する必要がある。また、「ピア学習」「認知的志向」「情動調整」を全く使用しない者が存在したことを念頭に、遠隔授業の場であっても「ピア学習」ができる工夫をし、「認知的志向」をはじめ他の学習方略の使用を高めるようにする必要があると考える。また、意欲低下など様々な背景を持つ学生がいることをふまえ、そういった学生が取り残されない様に、学習環境を調整することも教員の役割であると考えられる。

## 本研究の限界

本研究では、以下の限界がある。1つは対象大学数が少ないことである。今回は東海地方の看護系大学5校としたが、

COVID-19への対応は地域性的影響も大きいことから、本研究の一般化には限界がある。2つ目に1・2年次生のみを対象とし、3年次以降の各看護学領域の看護技術の学習を網羅していない点がある。3つ目に、看護技術学習方略の使用と教育方法との関係が十分に調査できていない点がある。しかしながら、コロナ禍の新しい教育方法に、急遽対応せざるを得なかった看護学生の学習状況を示す一資料になると考える。

## V. 結論

コロナ禍の東海地方の看護系大学5校の1年次生、2年次生を対象に、看護技術学習方略の実態について、無記名の質問紙調査を行った結果、以下のことが明らかになった。

1. NSLSS得点・下位尺度得点は4.00点から4.50点であり、コロナ禍による影響は認められなかったが、最小値は1.00点から1.25点と低く、「ピア学習」と「認知的志向」への影響があったことが示唆された。
2. コロナ禍の影響として、学習方略の使用には個人差が大きくなることが示唆された。
3. 1年次生と2年次生のNSLSS得点・下位尺度得点の中央値に、有意差はなかった。

## 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

## 謝辞

本研究に同意しご協力下さった大学の皆様及び看護学生の皆様に深く感謝致します。

## VI. 引用文献

- (1) 文部科学省. “新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況”. 学校に関する状況調査、取組事例等. 令和2年7月1日時点. [https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt\\_kouhou01-000004520\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf), (参照 2022-10-

- 23).
- (2) 文部科学省. “大学等における後期授業の調査について”. 学校に関する状況調査、取組事例等. 令和2年9月15日. [https://www.mext.go.jp/content/20200915\\_mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200915_mxt_kouhou01-000004520_1.pdf), (参照 2022-10-23).
- (3) 文部科学省. “令和3年度前期の大学等における授業の実施方針等に関する調査の結果について”. 学校に関する状況調査、取組事例等. 令和3年7月2日. [https://www.mext.go.jp/content/20210702-mxt\\_kouhou01-000004520\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210702-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf), (参照 2022-10-23).
- (4) 文部科学省. “令和3年度後期の大学等における授業の実施方針等に関する調査の結果について”. 学校に関する状況調査、取組事例等. 令和3年11月19日. [https://www.mext.go.jp/content/20211118-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20211118-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf), (参照 2022-10-23).
- (5) 文部科学省. “大学等における後期授業の調査について（地域別状況）”. 学校に関する状況調査、取組事例等. 令和2年10月2日. [https://www.mext.go.jp/content/20210212-mxt\\_kouhou02-000006590\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210212-mxt_kouhou02-000006590_1.pdf), (参照 2022-10-23).
- (6) 文部科学省. “大学等における後期等の授業の実施状況に関する調査”. 学校に関する状況調査、取組事例等. 令和2年12月23日. [https://www.mext.go.jp/content/20210212-mxt\\_kouhou02-000006590\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210212-mxt_kouhou02-000006590_1.pdf), (参照 2022-10-23).
- (7) 日本看護学校協議会共済会. “看護職養成校の新型コロナウイルス(COVID-19)感染拡大への対応に関する調査 集計概要: ~臨地実習とICT関連授業の扱いを中心に~”. 日本看護学校協議会共済会ホームページ. 2021年2月16日. [http://e-kango.net/images/top/20210216\\_report.pdf](http://e-kango.net/images/top/20210216_report.pdf), (参照 2022-10-23).
- (8) 桑原まゆみ, 永瀬つや子, 松岡あやか, 他. 新型コロナウイルス感染症拡大状況下における母性看護学演習の実践報告. 南九州看護研究誌. 2021, 19(1), p.11-16. [http://www.med.miyazaki-u.ac.jp/home/kango/files/2021/03/19-1-2021\\_02.pdf](http://www.med.miyazaki-u.ac.jp/home/kango/files/2021/03/19-1-2021_02.pdf), (参照 2022-10-23).
- (9) 清水八恵子, 水越秋峰, 森本直樹, 他. 「看護技術論 I」における遠隔授業の実際と看護技術教育の課題. 朝日大学保健医療学部看護学科紀要. 2021, (7), p.26-31.
- (10) 菅原啓太, 灘波浩子, 川島珠実, 他. 新型コロナウイルス感染症の影響下における基礎看護学領域の取り組み: ー基礎看護方法 IV (診療補助技術)の授業検討からー. 三重県立看護大学紀要. 2020, (特別号), p.22-27. <http://doi.org/10.15060/00000271>, (参照 2022-10-23).
- (11) 三谷理恵. コロナ禍におけるオンデマンド型看護技術演習の実践. 兵庫医療大学紀要. 2021, 9(2), p.73-78.
- (12) 小布施 未桂, 縄 秀志, 鈴木 彩加, 他. COVID-19のパンデミックにおける統合科目(基礎看護学)の取り組み. 聖路加国際大学紀要. 2021, 7, p. 171-176. <http://doi.org/10.34414/00016381>, (参照 2022-10-23).
- (13) 高橋方子, 富樫千秋, 米倉摩弥, 他. 新型コロナウイルス感染症対策下における「診療の援助技術」授業の工夫に対する学生の評価. 千葉科学大学紀要. 2021, (14), p.123-133.
- (14) 緒方優, 佐居由美, 縄秀志, 他. コロナ禍における在宅学習としての日常生活援助の実技練習の取り組み. 聖路加



- 国際大学紀要. 2021, 7, p.103-108.  
<http://doi.org/10.34414/00016369>, (参照 2022-10-23).
- (15) 廣瀬允美, 石塚淳子, 小元まき子, 他. 実技を伴う授業 (生活援助技術) におけるオンラインによるリアルタイム授業の試み. 順天堂保健看護研究. 2021, 9, p.52-57.
- (16) 野口睦美, 牛越幸子. 助産診断技術論演習における遠隔授業のシミュレーション教育の取り組み. 神戸女子大学看護学部紀要. 2021, 6, p.39-45.
- (17) 富田英里子, 野口睦美, 牛越幸子. 分娩介助技術習得に向けた遠隔授業に備えた取り組みーポストコロナを見据えた視聴覚教材の作成ー. 神戸女子大学看護学部紀要. 2021, 6, p.25-28.
- (18) Bloom, B. S. Hastings; J. T. & Madaus, G. F. 教育評価法ハンドブックー教科学習の形成的評価と総括的評価. 梶田叡一, 渋谷憲一, 藤田恵璽訳. 第一法規, 1973, p.429-441.
- (19) 勝又浜子, 加藤典子, 清水嘉与子編. 看護法令要覧 令和4年版. 日本看護協会出版会, 2022, p.82.
- (20) 勝野正章, 窪田眞二, 今野健一, 他編. 教育小六法 2022年版. 学陽書房, 2022, p.299-300.
- (21) 緒方優, 榊美樹, 賀数勝太, 他. コロナ禍における看護実習室の自己学習支援の在り方. 聖路加国際大学紀要. 2022, 8, p.162-165. <http://doi.org/10.34414/00016589>, (参照 2022-10-23).
- (22) 三吉友美子, 細田泰子. 看護技術学習方略尺度の開発ー信頼性・妥当性の検討ー. 日本看護学教育学会誌. 2015, 24(3), p.1-11.
- (23) 野村晴香, 平瀬節子, 坂本雅代. 基礎看護技術習得に向けた自己学習への取り組みの実態. 高知大学看護学会誌. 2009, 3(1), p.45-49.
- (24) 奥野友紀, 三吉友美子, 皆川敦子, 他. 看護技術学習方略が看護技術の修得へ与える影響. 日本ヒューマンヘルスケア学会誌. 2021, 6, p.51-60.
- (25) 山本圭三, 樋口友紀. 変わりゆく学びの形に対する現代大学生の適応の諸相: 新しい授業形態への適応とコロナ禍生活の受容に注目した計量分析-. 摂南大学教育学研究. 2022, (第18), p.37-58.
- (26) Dastan, N. B., Kaya, F., Uluman, O. T., et al: Psychosocial and Mental Effects of Covid-19 Pandemic on Nursing Students in Turkey: A Cross-Sectional Study. International Journal of Caring Sciences.2021,14(3),p.1900-1907.
- (27) 文部科学省. “新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査”. 学校に関する状況調査、取組事例等. 令和3年5月25日. [https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf), (参照 2022-10-23)
- (28) 藤田正, 富田翔子. 自己調整学習に及ぼす学習動機および学習方略についての認知の影響. 教育実践開発研究センター研究紀要. 2012, 21, p.81-87.
- (29) Zimmerman, B. J. & Martinez-Pons, M: Student Differences in Self-Regulated Learning : Relating Grade, Sex, and Giftedness to Self-Efficacy and Strategy Use. Journal of Educational Psychology.1990, 82(1), p.51-59.
- (30) 伊藤崇達. 自己調整学習の成立過程 学習方略と動機づけの役割. 北大路書房, 2009, p.75.

# The Actual Nursing Skills Learning Strategies of Nursing Students during the COVID-19 Pandemic

Yuki Okuno <sup>1</sup>, Makiko Kawamura <sup>2</sup>, Harumi Kato <sup>2</sup>, and Chigusa Kozono <sup>3</sup>, Motomi Hiraga <sup>4</sup>,  
Yumiko Miyoshi <sup>2</sup>

<sup>1</sup> School of Nursing, Sugiyama Jogakuen University

<sup>1</sup> (Current affiliation: School of Nursing, Nagoya University of Arts and Sciences)

<sup>2</sup> Faculty of Nursing, School of Health Sciences, Fujita Health University

<sup>3</sup> Asahi University Faculty of Health Sciences Department of Nursing

<sup>4</sup> School of Nursing, Nagoya University of Arts and Sciences

## Summary

**Background:** The COVID-19 pandemic has resulted in changes in educational methods, including in distance learning. We speculate that the way nursing skills are learned may also have changed as a result. Therefore, this study aims to clarify the actual nursing skills learning strategies of nursing students during the COVID-19 pandemic.

**Methods:** In July 2021, a paper or web-based, unmarked questionnaire survey was conducted using the Nursing Skills Learning Strategies Scale (NSLSS). Participants were 824 first- and second-year students from five nursing universities in the Tokai region, who spent their entire enrollment in the COVID-19 pandemic.

**Results:** Data of 465 students were analyzed (58.0% response rate, 97.3% valid response rate), with a median NSLSS score of 4.24, minimum score of 1.12, and maximum score of 6.00. The median subscale scores ranged from 4.00 to 4.50, maximum scores were all 6.00, and minimum scores were 1.25 for “Planning/Adjustment,” and 1.00 for “Cognitive Orientation,” “Peer Learning,” and “Emotional Adjustment.” The median NSLSS scores by grade level were 4.18 for first-year students and 4.29 for second-year students, with no significant differences.

**Conclusion:** The NSLSS and subscale scores were similar to that of previous studies. However, some participants did not use “Peer Learning” and “Cognitive Orientation” at all. This suggests that although the COVID-19 pandemic did not significantly impact nursing students’ learning strategies, the effects vary between individuals. We also expected that the COVID-19 pandemic would have a greater impact on second-year students than on first-year students, although the difference was not significant.

**Keywords:** Nursing skills education, Nursing Student, Nursing Skills, Learning Strategies, COVID-19